空想

空想をつねにさまよはしめよ、
喜びは決してわが家にはない。
雨が礫の如く打つときの泡の如く
妙なる喜びはたゞ一觸れで溶けてしまふ。
それなら、なほも空想を越えて遙か彼方に擴がれる天の方へ
翼をもつ空想をさまよはしめよ。
心の檻の扉を廣く開いて、
空想は跳り出で、雲の方へと翔りあがつてゆく。

おゝ妙なる空想よ、そを解き放てよ、
その喜びが不斷のこととなれば損はれる、
春の樂しみは
花が咲いてしまふと消えうせる。
秋の赤き唇を觸れた木の實もまた萎えはてる、
霧や露のあひだに、そが風味をもて飽滿するとき。
それなら何がよいのであらう。
冬の夜の精靈なる
乾いた粗朶が輝やかしく燃えたつとき、
また音もなき大地が蔽はれて、
農童の重い靴から

その靴に固り附いた雪が引摺つてゆかれるとき、
またいつもならまだ晝なのに早くも夜になつたとき、
暗い陰謀のうちで
大空から晩を追放するために、
煙突の片隅に汝をば座らせよ。
そこに汝を座らせよ、
高き目的の意味におぢけついた心をもて、
心情のために準備された高き仕事を命ぜられたる
空想を外の世界に遣はせよ。彼女をば遣はせよ。
彼女には自分にかしづかせる輩下がある。
霜が降りても、彼女は

in dark conspiracy

大地が失つてしまふた美をもたらすであらう。
彼女は、夏の氣候のありとあらゆる喜びを
また露しげき芝生、あるひは刺多き小枝から
五月の花をことごとくもたらすであらう。
また靜かにも不可思議なひそやかさをもて、
積みあげられた秋の豐かな一切の實のりをもたらすであらう。
彼女は、三種の酒が程よく盃に調合されたもののやうに、
これらの喜びを混ぜあはすであらう、
それから汝はそれをぐいと飲むであらう。
汝は、遙かに聞ゆるほがらかな收獲の頌歌を聞くであらう。
刈り取られたる穀物のさら〳〵とひゞく音や、

可愛ゆい鳥どもが朝をほめたゝえる歌聲を聞くであらう。」
そしてその同じ瞬間に、耳傾けて聽きたまへ。
そは四月始めの雲雀か、
または木枝や汝を探しながら、
いそがはしく鳴きしきる白嘴鴉である。」
ちらりとひと眼見れば、汝は
雛菊や金盞花や、白く飾りたてられた谷百合や、
已にほころびた櫻草の、先づ籬に生へたものや、
五月なかばの女王にしていつも變らぬ青王なる
蔭に生ひたつ綿棗兒や、
またありとあらゆる一切の木の葉や、一切の花が

おのが身と同じに驟雨で眞珠の如くなつたのを見るであらう。
汝は、穴の中に眠れるみすぼらしい
野のはつか鼠の姿や、
日の照る岸にその皮膚を投げてゐる蛇が
冬中の眠りで弱り果てた姿を見るであらう。
また汝は、牝鷄の翼が
その苦むす巣に靜かに憩ふてゐるとき、」
巣に生んである雀斑のついた卵が
山櫨の木で孵化するのを見るであらう。
それから、蟬の巣がそのなかの群れを投げ出だすときのあせる
樣や、びつくりする樣や、

また、秋のそよ風が歌ふまに、
實(みの)れる橡實(どんぐり)がばら〳〵と音をたて〻落つる樣を見るであらう。

お〻、妙なる空想よ。そを解き放てよ。
萬象も不斷のこととなれば損はれる。
見飽くほどに見つめられても、
なほ色褪せぬ頰がいづこにあらうぞ。
唇がとこしへに新らしく成熟せる
處女(をとめ)がいづこにゐるやうぞ。
生々(いきいき)してゐるところはなくとも、
疲れ果てぬ眼がいづこにあらうぞ。

人が常にいづこの場所でも出會ひたいと願ふやうな
顏がいづこにあらうぞ。
やさしくはあつても、人が幾度となく聞きたいと願ふやうな
聲がいづこにあらうぞ。
雨が礫の如く打つときの泡の如く
妙なる喜びはただ一觸れで溶けてしまふ。
それなら、翼をもつ空想をして、
汝が心に情人(ミストレス)となれる空想を見出ださしめよ
またシアスの娘が、美くしき酒盃をたづさへ、
ヂユピターの元氣がなくなつてゐるひまに、
彼女の帶がその黃金のとめ金を滑(すべ)らせ

自分の足の裳裾に落ちたとき、
ヂュピターの盃をさゝげ持つヒーブの如く白き
腰と傍腹(わきはら)とをもてる身の
いかにして顔をしかめ、いかにして咎めだてするものであるか
を
苛責の神なるプルートーが彼女に教へ込まぬうちに、
彼女の如く愛らしい眼を見出ださしめよ。
絹にも似たる空想の留綱の
その綱目をば破れよ。
彼女の牢獄の糸と、彼女が持ち來るやうな喜びとを
速やかに破り去れよ。

空想をつねにさまよはしめよ。
喜びは決してわが家(や)にはない。

マーメイド酒場の詩

逝きて歸らぬ詩人の靈魂よ、
マーメイド酒場より善美を極めたる
幸多き野、または苔蒸す洞窟の
樂園を汝知れるや。
わが酒場の主人(あるじ)が賣るカナリア島到來の酒より、
うまく汝がちびり〳〵と口にしたる酒ありや。
あるはまた鹿肉の味よきバイよりも美味なる
樂園の木の實ありや。おゝ、卓(すぐ)れたる食べ物よ。

それは恰も勇敢なるロビン・フッドが
その愛人なる處女(をとめ)のメアリアンとともに、
角盃や把手つきしカンより常に吸ひ、また痛飲せし時の如く、
調理せられてありしかな。
われ聞きぬ、ひと日
わが酒場の看板消え失せて、
その行方を知れるもの誰一人とてもなく、」
つひに或る星占ひ者の鷲ペンは
羊皮紙に物語をば記しつ、
曰く、汝ら逝きて歸らぬ詩人らは、
聖き呑みものを啜りつゝ、

その得意時代にあるを見たりと。
滿足なる香りとともに
黄道宮にあるかのマーメードに乾盃をあげながら。
逝きて歸らぬ詩人の靈魂よ、
マーメード酒場より善美を極めたる
幸多き、または苦蒸す洞窟の
樂園を汝知れるや。

秋に寄す

一

霧深く、熟れたる果實の多き季節よ、
果實を熟せしむる太陽のいとも親しき友達なる秋よ、
秋は謀る太陽と、
茅葺の軒端をめぐる葡萄の枝に果實の重荷をつけ、そを祝福
せんすべを。
また田舍家の苔むす樹木を林檎の實もてたわゝにし、

すべての果實をその髓までも滿遍に熟せしめ、
瓢をふくらかに實のらせ、甘き核をば、
榛の殼のうちにふくらませんすべを。
遂に花が咲き日々はこのまゝ永く打續くものならんかと思ふま
でも、
夏におくれたる花を蜂のためとて次ぎに芽ぐませんすべをま
た、
そは花瓣のうち濕りたる細胞に夏が溢るるばかりの滋液を
滿たしおきたるゆゑにこそ。

二

汝がたくはへしもののうちに汝の姿を見たるは誰ぞ。
誰か折々は汝を外に出て求めゆくことあるも、
穀倉の床の上に氣も輕く腰うちおろせる汝の姿を彼は見出すを
えん、
汝が髪ははためく風にやさしくも吹き立ちぬ。
あるはまた熟睡に沈む熟れかゝりたる畑の上にて、
罌粟の香ひよき煙にまどろみぬ、かゝるとき汝の鎌は
積まれある次の刈禾や、莖の卷きつく花には觸れず、そを
捨ておきぬ。
かくて落穗拾人の如く、汝は
小川をよぎりてその重たき頭を堅固に持ちこたへたり。

あるはまた果汁搾出機械の傍らに、根氣强き樣なして、
汝こそは每時間除ろに漏れ出づる最後の雫をも見まもるか
な。

三

春の歌聲今いづこぞ、あゝ、そは今いづこ、
その歌思ひそ、汝にも亦汝の樂の音あるものを、——
棚曳く雲は靜かに沈みゆく日の茜色に彩られて花と咲き出で、
薔薇色なして切株を染るとき、
かくて小さき汝が、河の邊の柳の枝のまにまに
そよ風たち、また風ぐが如く、高く吹きあげられ、

あるはまた下に沈みつゝ、悲しき調べをもて歎き鳴くとき
汝が歌のあるものを。
肥え太りたる仔羊が岡多きところより聲高く鳴く音にも、
垣根の蟋蟀のすだくにも。さてはまた胸赤き駒鳥が
菜園よりおだやかなる高音もて音を吹きたつる時にも。
寄り集へる燕が空に囀づるその音にも秋なる汝が樂の音はあ
るものぞ。

遺稿及び拾遺詩より

もの凄き夜にも似たる十二月に

一

もの凄き夜にも似たる十二月に、
　幸あまりある、幸ある樹木よ、
汝(いまし)が枝はその縁なす幸を
　たえて思ひ出だすことなし。
霧(みぞれ)は音(ね)をたてゝ枝間(えだま)に吹きいるも、

北風はその枝々をそこなふをえじ。
あるはまた春の來りて芽ぐみゆくとき
雪解の枝を凍てつかするはたえてなし。

二

もの凄き夜にも似たる十二月に、
幸あまりある、幸ある小川よ、
汝の泡は太陽神の夏の樣をば
たえて思ひいだすことなし。
妙なる忘却によりてこそ
水晶にも似たる氷結の岸を毀つことをやむるかな、

凍てつくころほひには
すねることたえてなし。

三

あゝ、やさしき少女や少年も
多くはかくあらまほし。
されど過ぎて歸らぬよろこびを
かこたざりし人の誰かある
いかなるすべも悲しき變化を元の喜びに戻しえず
また痲痺したる官能さへそれに無感覺であることのかなはぬと
き、

變化を知り、またそを感ずることが
歌に歌はれしことたはえてなきものぞ。

小曲（鳩）

わが飼ひならしつる鳩一羽、あいらしの鳩ゆきぬ。
我は思ひぬ悲しみに、かれはこの世を去りにきと。
あゝ何をかかれは悲しめる、足は結はれてありしかな、
この身手づからあざなへる、ただ一筋の絹のため。
愛らしの小さやかなる赤き足！　汝なんとて死にたるぞ。——
何とて汝は我を捨てしぞ、愛らしの小鳥よ、何がゆゑ。
汝は森の葉がくれにただひとりにて住みしかな、
うるはしきものよ、何とて汝は我とともには住まざりしか。

われあまたゝび汝にくちづけ、白き豆をばとらせたり。
など樂しくは住み果てぬ、みどりの森に巣くふごと。

ファンニイに寄する賦

一

自然といふ醫師よ。わが魂に刺胳法を行へよ。
わが心情より詩をとりいだしてそを安らかにし、われをば憩は
しめよ。
汝がトウリボウドの上にわれを投げいだせよ、
わが滿ちあふるゝ胸のうちより、思ひに餘る切なき詩情の洪水
が退くに至るまで。

詩題よ、詩題よ、偉大なる自然よ。詩題を與へよ。
わが夢をば見始めさせよ。
われは行きて、汝をば見る、汝そこに立ちてあればこそ。
冷やかなる空氣のうちにわれを麾(さしまね)くことなからしめよ。

二

あゝ、わが一切の恐れや、希望や、喜悅や、胸とどろかす災(わざはひ)の
いみじき住家なるいとも懷しき戀人よ。
察するに、今宵おんみの美は
恍惚たる、また痛みを覺え、また隸屬するものの眼(まなこ)をもて、
柔(やさ)しくもうち驚ける時の如く、

光彩ありて輝やかしき
喜びの微笑みをたゝふ。
われはうち見まもり、見まもるかな。

三

貪婪の面をなして、いま、わが愛するおんみを吸ひ取らんとす
る眼なざしに見つむるは誰(た)ぞ。
わが銀色の月なるおんみを曇らすほどに見つむるは誰ぞ。
あゝ、せめてはかの手をけがすことなからしめよ。
願はくは、たゞ戀の情熱をして

間もなくわれより背きておんみが心の潮を
他に向けしむることなからしめよ。
おゝ、愛情によりて、
わがためにこの上もなく速き脈搏をば貯へよ。

四

わがためにそを貯へよ、美くしき戀人よ。よしや音樂が
温き空氣のうちに放逸なる幻想を發するとも、
また踊りの危險なる環のなかを飛びまはるとも、
四月の日の如く

微笑みて、冷めたく、樂しくあれ、
つゝましやかなる、美くしきほどにつゝましやかなる百合の如
く。
かくて、神よ、
わがためにいや增す温き六月の日ぞめぐり來らん。

五

わがファンニィよ、おんみは言はん、待ちたまへ、こはまこと
ならず、と。
おんみが柔らかき手を

心臓の鼓動打てる
おんみが雪白の胸肌に置きたまへ。
胸のうちを明したまへ――そはいさゝかも新らしきものにはあ
らず――
女性は、海に漂ふ羽毛の如く、
一切の風や潮に彼方此方へと搖られてならぬものなるか。
また牧場より吹き去られたる蒲公英の絮の如く
定めなき速さに支配されてはならぬものなるか。

六

われはそを知れり、そを知れりとは、
われがおんみを愛する如くおんみを愛するものに對して諦(あきら)むる
ことなるぞ、美くしきファンニィよ。
わが心はいづれの地にもおんみを求めて翔りゆく、
おんみが彷徨ひいづれば、
いたましきわが心の落着くひまもなし。
烈しくも數多(あまた)なる痛みを持つ戀人よ、淋しき戀人よ。
限りなくも愛(いと)しきものよ、かくて、
身悶えするほどに妬ましき思ひよりわれをば解き放てよ。

七

あゝ、もしもおんみが、この哀れなる、生氣なき、ただ一時間
の短き誇り持つ身のわれを高めて、
わが力なき魂を重んじたまふなら、
「戀の神聖なる職座」をば何人にも犯さしめざれ、
あるはまた荒々しき手によりて
聖靈の燒麵麭を裂かしめざれ。
いま蕾を出したるばかりの花には誰一人觸れしめざれ、
もしもそれに觸れしむれば、戀人よ、
わが眼は死の眠りに閉づるやも知れざるを。

何故今宵われは笑ひたるぞ

何故今宵われは笑ひたるぞ。一つの聲音も語るものはあらじ。
神も、また峻嚴なる應へをなす惡魔も、
天國または地獄より答ふることを許さず、
かくてわれ、人間のわが心情に直ぐ向ふかな。
心情よ、汝とわれとはこゝにて悲しく、また孤獨なり。
何が故にわれは笑ひたるぞ、とわれは言ふ。おゝ人間の痛まし
さよ。
おゝ、暗黑よ、暗黑よ、われはとはに呻吟して、

天國や地獄や心情に甲斐なき問ひをいださねばならぬ。
何故われは笑ひたるぞ。われは知るこの「存在」の借りものなるを。
わが空想はこの上もなき祝福にまでも擴がりゆく。
されどわれはこの眞夜中にも滅び果てん。
かくてこの世のきらびやかなるちぎれ〳〵の旗指物を見ん。
詩句や、名聲や、美はまことに情熱に富みたるものなれども、
「死」はなほさらに情熱的なり——「死」は高價なる報酬なるかな。

かの日は逝けり

かの日は逝けり、その一切のたのしきものは逝けり。
樂しき聲、樂しき唇、柔らかき手、更に柔らかき胸、
温き呼吸、輕き囁き、優しき半音、
輝やかしき眼、よく整へる容姿、こびあるもの腰ぞそれ。
花やその一切の蕾の美くしさは萎れ果て、
わが眼よりは美を見る力ぞ衰へ去り、
わが腕よりは美の形衰へゆき、
聲も、温情も、白さも、樂園も衰へて、

夕の來るころほひには名殘をしくも消え果てぬ、
香ぐはしき葉に被はれたる戀のための蔭くらき安息夜——
否、ほの暗き安息夜が、喜悅を隱すために、
厚き闇の織物を織るとき。
されどわれ終日戀の祈禱をば讀みければ、
戀は、われが精進し、祈れるを見て、われを眠らしめん。

つれなきたをやめ

一

あゝ運命よからぬ方よ、おんみは何をか惱みたまふぞ、
ひとり寂しく蒼ざめ彷徨ひたまひて。
菅は湖より枯れ失せぬ。
鳥の鳴く音はたえてなし。

二

あゝ運命よからぬ方よ、おんみ何をか惱みたまふぞ、
さばかり憔れ、憂ひに沈みたまひて。
栗鼠の穀倉滿ち足らへり、
收獲ぞ果てにける。

三

われは見るおんみの額に百合花あるを、
そは惱みにうち濕り、熱き露のかゝりて。
またおんみが頰には、束の間に萎み果つる
褪せゆく薔薇をこそまた。

四

われは牧場のなかにありて
いとも美はしきをみなに會ひぬ、うら若き仙女にこそ。
その君が髪は長く、足どり輕やかに、
眼には野育ちの影見えぬ。

五

足なみゆるき馬の背にわれはその君をかい乘せて、
君がほかにはひねもす何もわが眼にはいらざりき。
そはつねに身を横ざまにかたぶけて

仙女の歌を口ずさめばぞ。

六

君が頭のためにとて、われは花環を組みしかな、
また腕のかざり、香ひよき帶を。
戀ひせし如くわれをうち見まもりて、
えも言はれぬ嘆息を洩らしける。

七

その君、味ひよき草の根や、野の蜂蜜や、
天の甘露をわれにとらせたり。

また口より出づる言の葉かよはねど、
まことにわれはおんみを愛す、と。」

八

その君はわれをおのが魔洞に誘ひゆき、
そこにて眸を凝らし、深き嘆息を洩したり、
「またそこにてわれは君が狂ほしきまでに悲しめる眼をふたぎ
——
かくて眠れよとばかり接吻(くちづ)けぬ。

九

われら二人は苦むす上にて眠りしかな、
そこにてわれは夢みたり、あゝわざはひの前知らせぞ。
わが見たる今のこの夢は、
冷やけき岡の斜面にありて。

十

われは見たり蒼ざめたる國王を、小さき國の君主らをも、
また戰士らを、この人々は悉く蒼ざめて生なきものの色を帶ぶ。
口々に呼びけらく——「つれなきたをやめ汝をばとりこにす、」
と。

十一

われは見たり、闇のうちに、飢ゑたるものが、
恐ろしき警告に廣くひらきし唇を、
かくてわれ夢よりさめぬ、今ぞ知るわが身は冷やけき岡の斜面にありけるを。

十二

これこそわれ一人寂しく蒼ざめて
こゝに彷徨ひつくすことのもとなれ。」
よしや菅は湖より枯れ失せたるも、

また鳥はたえて歌はずとも。

大正十五年九月十五日印刷
大正十五年九月十三日發行

不許複製

泰西詩人叢書第十七編
集詩ツィキ
定價金九十錢

譯者　渡邊正知
東京市牛込區横寺町四三
發行者　藤後誠雄
東京市牛込區横寺町四三
印刷者　田友寛治

發行所
東京市牛込區横寺町四三
聚英閣
電話牛込四六二番
振替口座東京四七八六九番

印刷所　泰信堂印刷所
電話六六一七番

◈ 詩歌

松山 敏著	青春の憧憬	八〇	四
下村 宏著	芭蕉の葉蔭	一・四〇	一六
若山牧水著	批評と添削	一・五〇	一八
蘇武錄郎譯	ハイネ書簡集	一・四〇	一八

——泰西詩人叢書——

牛山 充譯	シェリイ詩集	八〇	四
中村詳一譯	エマスン詩集	八〇	四
生田春月譯	バアンス詩集	八〇	四

藤林みさを譯	佛蘭西近代詩集	九〇	六	
佐藤一英譯	ポオ全詩集	一・一〇	八	
渡邊正知譯	ブレイク詩集	九〇	六	
松山敏譯	ハイネ名詩選集	八〇	四	
松山敏譯	バイロン名詩選集	八〇	四	
松山敏譯	ゲーテ名詩選集	八〇	四	
加藤利美譯	ユーゴー詩集	一・〇〇	六	
木内打魚譯	ブラウニング詩集	九〇	六	
前田鐵之助譯	ジャム詩集	一・〇〇	六	
村井英夫譯	グウルモン詩集	八〇	六	
渡邊康夫譯	ロゼッチ詩集	一・〇〇	六	
木内打魚譯	ワーヅワース詩集	九〇	六	
大山廣光譯	ミユッセ詩集	九〇	六	
渡邊正知譯	キイツ詩集	九〇	六	
井口正名譯	テニスン詩集	八〇	六	

389
87

389
87

終